

屈で教えた方がはやく進歩する。競泳に限らず長期にわたって記録の更新が続いているのは不思議でしょう。「青少年の体力低下」と報道される中で記録だけは上がっているのですから。これはトレーニングシステムの技術革新ですね。「倒れるまで走って初めて練習になるんだ」というのは煎じ詰めれば精神論と言われても仕方ありません。

良い教育システムとは、「できる」までの時間を最短にできるシステムでしょう。まずは自動車を運転してみて、五感と理屈のどんな所を使うのかを知り、どんな失敗をしがちであるかを体験してみる必要があります。大切なことは、「下手な段階からなるべく速く上手になる」ということであって「多くのことを知る」ということではない。ビジネススクールの目的は、できるだけ早く経営上の「問題発見能力」と「事業化能力」をみがくことにあります。一口にいえば、理に適ったビジネスができる、これが第一の目的です。

企業経営は同じ企業に長年勤めているうちに自然にできるようになる時代は、終わったと言わざるをえません。いい仕事、大きな仕事をするには、そのための理論と専門技術を体系的に身に付けておかないと商談や折衝にすら事欠く、そんな時代が日本でも近づいています。ビジネスの現実人は人材評価の現実です。評価は、究極的には自らの実力で決まるものです。経験と勘では限界がある。自らの頭で考えた合理的なビジネスプランが経営現場でも模索されている。だから、なのです。

では、商大のビジネススクールはどんな個性を持っているのでしょうか？

商大が目指すビジネススクールとは

履修モデルから「商大」が目指すビジネススクールの雰囲気伝わってくるはずですよ。

1. ニュービジネスの創造（履修モデル1）
2. ベンチャー・ビジネスへの挑戦（履修モデル2）
3. リストラクチャリングの構想（履修モデル3）
4. キャリアアップ志向（履修モデル4）

大学院案内ではもう少し硬い言葉を使ってましたが、「自立と革新への道」を提供しようという「商大」の意気込みが多少でも伝わるのではないのでしょうか。

入学するまでのバックグラウンドは問いません。幸いにして今回は会計専門家の方も受験してくださいましたし、エンジニアの方も志願してくださいました。学生からの受験もありました。ビジネススクールの教育体系は図のような積み上げ型になっており、門戸は四方八方開放されています。短期間のうちに効率的にビジネス能力向上の拠所が身につくように構成されています。学位の英名は「MBA」です。もちろん入学される方の勉学と意欲と努力が最も大事なファクターであるとは言えますが。

「商大」のルーツは明治43年に高等商業学校として設立された源にさかのぼります。開学以来、北の商都小樽でずっと「高度職業人の育成」を担ってきたわけですよ。今回、ビジネススクールに向けて舵を切り、未来の航路を開こうとする選択は「商大」にとってごく自然なものなのです。

